江戸のまちをたどって 4

tadotte@asahi.com

晩年の視線が気になる

母校の東京芸大で助手をしていたとき、前原恵美さん(50)が研究対象としてはまったのが柳沢信鴻の「宴遊日記」だった。俳諧で一派をなし、歌舞伎や音楽を存分に楽しみ、食べ歩きにも目がない粋人の生き方にひかれた。

信鴻は、5代将軍徳川綱吉の側用人として権勢を振るった柳沢吉保の孫で、大和郡山藩の2代藩主。1773(安永2)年、50歳になったとして東京・駒込の下屋敷で隠居生活に入った。この屋敷の庭園が六義園だ。日記はこの年から亡くなるまでの19年間、身辺に起きたことを細大もらさず記録している。晩年の6年分は「松鶴日記」と名付けられた。

前原さんによると、翻刻本に収録された宴遊日記12年間分で、信鴻の観劇が確認できたのは114回。さらに信鴻は敷地内に舞台を設け、女中たちを役者にして自作を演じさせていた。節付け(作曲)や振り付けも手がけた。

女中の採用に際しては、楽器や唄、踊りなどの実技を課し、自ら審査した。

柳沢信鴻は引っ越した当初、園内で道に迷ったこともあったという＝東京・駒込の六義園、中井征勝撮影

1780(安永9)年2月6日、神田山本町の「りと」20歳は常磐津節を披露した。評価は「巧者」。すぐに書類の提出を申しつけ、16日には引っ越し、「とり」と改名した、とある。

こうしたオーディションは年に10回前後、多い年は20回を超えた。目を引くのが、浄瑠璃の一派「豊後節」が堂々と演じられていたことだという。心中もので人気を博したが、風紀を乱すと幕府に禁止された。「お上が禁じても、庶民の豊後節熱まで完全に奪うことはできなかったのでは」と前原さんは話す。

日記は芸能ざんまいの日々を書き留めるだけではない。1783(天明3)年7月6日「暮れすぎより南方震動の如く響き(略)夜なお震動の音響き寝られず」。7日「浅間のやくる成へしなと云。烟の如く見ゆるは砂の下る也」。11日「今日冷気、綿入を着る」。12日「今日も冷気、綿入を着る」。

「炎暑」と書いていたのが浅間山の噴火で一変する。冷害を予感させる記述がこの後も続く。その冷害はやがて天明の大飢饉を招来する。

日記は1ページにつき1行15字程度で約10行。日付、天候を記した後は○で事項別に区切っていて、清書したとみられる。原本は奈良県大和郡山市の柳沢文庫が所蔵している。

前原さんは国立文化財機構東京文化財研究所の主任研究員として、伝統芸能の保存継承にかかわる仕事をしている。もう一つ、常磐津の三味線方・紫緒という顔もある。

幼いころからピアノを習い、クラシック音楽を極めるつもりでいた。大学院に進み、留学した同級生から「娘道成寺の資料を送って」とファクスが届く。自分も日本の音楽そのものにもっと迫らなければと、三味線の練習に本腰を入れるようになった。

死の直前まで書き続けた「松鶴日記」に関しては、本格的な研究がされていないようだ。いよいよ老境に入った信鴻がどのような視線を世相に向けていたのか。前原さんはそれが気になるという。

(大阿久修)

2017年9月1日(金) 朝日新聞 夕刊